判決年月日	平成24年10月15日	担当部	知的財産高等裁判所 第2部
事件番号	平成24年(行ケ)第10040号		
<p>○ 名称を「フィルムインサート成形方法において取り扱い可能な、両面高光沢の、ゲル体不含の、表面硬化したPMMAフィルムの製造方法」とする発明に係る特許について、特許を受けようとする発明が明確でないとして、特許出願拒絶査定に対する不服審判請求を不成立とした審決を、明確性の判断に誤りがあるとして取り消した事例</p>			

(関連条文) 特許法36条6項2号

1 事案の概要

本件は、特許出願拒絶査定に対する不服審判請求を不成立とした審決の取消訴訟である。争点は、明確性及び手続違背の有無である。

2 裁判所の判断

(1) 本願明細書の記載によれば、ロールギャップ内には高い型締圧力がかけられるが、その際、型締装置として、可動ロールがロールの軸受け位置で接続棒と結合されたスクリュウギヤを有する平行配置された2つの駆動装置により位置決めされたものを用いるため、型締圧力は、ロールの軸受けを介してロールギャップ内の溶融物にもたらされることは明らかである。そうすると、そのようにして溶融物にもたらされる高い型締圧力と、放冷する溶融物により惹起される圧力とにより、ロールに湾曲が生じることは、当業者であれば容易に予測しうるところである。そして、ロールは、上記のとおり、フィルムの全幅にわたって均一な厚さ分布とするために反らされているものである。

段落【0040】には「“反り”の定義」として、「中心に対するロール縁部の放物線状直径増大」であるとの記載があるが、その「反らされている」の意味を、段落【0040】の「“反り”の定義」とおり、中心に対してロール縁部が放物線状に直径が増大すると解したとすると、ロールが湾曲した状態では、ロールギャップ内の形状は線状とはならないため、フィルムの中央部分の厚さが大きくなり、全幅にわたって均一な厚さ分布とすることができず、ロールが「フィルムの全幅にわたって均一な厚さ分布とするために」反らされていることと矛盾する。よって、「反らされている」の意味を、段落【0040】の「“反り”の定義」とおり解することは、不自然である。一方、「反らされている」の意味を、上記技術常識のとおり、ロールの縁から中央に向かって放物線状に直径が増加すると解したとすると、ロールが湾曲した状態では、ロールギャップ内の形状は線状となり、フィルムの全幅にわたって均一な厚さ分布とすることができ、上記のような矛盾を生じることがない。

(2) 発明の詳細な説明を理解するに際しては、特定の段落の表現のみにこだわるべきではなく、全体を通読して吟味する必要がある。「反らされている」との請求項の文言において、これが技術的意味においてどのような限定をしているのかを特定するに際しても、同様である。

上記で分析したところによれば、請求項5における「ロール（110）が反らされている」について、特許請求の範囲の記載のみでは、具体的にどのように反らされているのか明らかでないものの、発明の詳細な説明の記載及び技術常識を考慮すれば、その意味は明確であるというべきである。発明の詳細な説明に記載された「“反り”の定義」が誤りであるとしても、当業者は、上記「“反り”の定義」が誤りであることを理解し、その上で、本願発明5における「ロール（110）が反らされている」の意味を正しく理解すると解することができるというべきである。上記「“反り”の定義」が誤りであるからといって、請求項5が明確でないということとはできない。

(3) なお、審査、審判の過程において、出願代理人が本願発明の技術的意味を理解していなかったために、段落【0040】を正確に日本語化しなかった事情があり、出願代理人の対応の稚拙さが審査官、審判官の判断を正しい方向に導かず、審決の判断を誤ったものと理解されるが、請求項5における「ロール（110）が反らされている」の技術的意味に不明確な点はない。

(4) 以上より、原告主張のその余の点を判断するまでもなく、審決は取消しを免れない。